

寺報 善 巧

発行
〒938 富山県下新川郡
宇奈月町 浦山 4 9 7
白雪山 善 巧 寺
☎宇奈月 0765(65)0055

寺
ごよみ

七 月

一日 お講 音沢



永代祠堂会

一四日 午後一時
一五日 午後一時
一六日 午前十一時 お講中陣
午後一時
一七日 午後一時
一八日 午後一時
一九日 午後一時
二〇日 午後一時 お満座
◎お満座の二〇日には、内陣法
名前での焼香があります。

二九日 雪ん子劇団五箇山公演

永代祠堂会

法話 里村了学師

七月十四日～二十日迄



慶びの春——夢の風船は大空高く飛んでなんと福島県まで……

「歎異抄」から引かせて頂きますよう。
「親鸞は、父母の孝養のためとて、一返にても念仏まうしたること、いまだ、さふらはず。そのゆへは、一切の有情はみなもて世々生々の父母兄弟なり。」
祠堂会は、善巧寺の門徒全体の御法要です。私の亡父、私の亡母と言う様な一人の人のための法要ではありません。此の、「私の」と言う言葉の中には、色々なニュアンスが、こっそりとかくれています。私の父・母の法要をすませて、やっと胸を下したと、満足なさっている姿をあなたが批判がましく言うわけではありませんが、聖人がはつきりと自分は自分の父母への親孝行のために一返も念仏したことがないと言われているお心の奥を、此の際察えてみようではありませんか。
御法要は、私だけの自力でつとまるわけではありません。有難い御縁によって、つとめさせて頂く法要を、私物化してはなりません。みんなと共に、みんなのおつとめを、みんなの力でつとめさせて頂く。そこには、自力のはからいは全く消え失せているのです。同じところで聖人は、続いて次のように仰言って居られます。
「わがちからにてはげむ善にても

七月は祠堂会

さふらはばこそ、念仏を廻向して父母をもたすけさふらはめ、ただ自力をすてて、いそぎ浄土のさとりをひらきなば、六道四生のあひだ、いづれの業苦にしづめりとも神通方便をもて、まづ有縁を度すべきなりと云々」
わたしの亡き父、わたしの亡き母を慕うてその追福を思うのは、子孫の至情です。併し父を亡くし、母を亡くしたのはわたしだけの力ではありません。わたしの力によって、わたしの父母の追福を思うだけでは御法要も、自力作善になって了います。
永代祠堂会は、善巧寺の門徒全体の法要です。世々生々何百年以前に亡くなった祖先の法要も、すべてを含めて、善巧寺本堂で住職が、登高座して勤まるのです。
亡くなった門徒の方々は、既に死生の境を異にして居られます。そこには、凡夫自力の及ぶことのできないものがあるのです。
此のような自力の及ばないところで、私達は皆様方の亡くなった父母兄弟の御法要をつとめさせて頂くのです。
心から、御参詣を御待ち申します。

住職 雪山俊之



第三回 空華忌記念講演

行信教授

高田慈昭師



選本願のお念仏
お念仏というものは、単なる零
團気やムードだけでは、心に安心
は届かないのであります。

そこで法然上人や親鸞聖人が求
められた大安心のお念仏の味わい
を、ここで明らかにしてゆかねば
なりません。

なぜお念仏がすべての人々を分
けへだてなく平等にまことの浄土
のさとりに至らしめるのかという
ことでありますが、法然上人にう
かがってみると「本願の念仏」と
おっしゃっている。これは如来さ
まの願ひのかかっている念仏とい
うことであります。

ただナンマンガブと称えていて
もまるでありがたくないし、安心も
できませんが、「本願の念仏にあう
こと」によって深く仏恩を知れり」と
親鸞聖人もおっしゃっていますね。
本願というのは仏さまの願ひと

いうことでありまして、私が願う
前に仏さまの方から願ひがかつ
ておったという、この世界が浄土
真宗であります。

ここを見失なってしまうたら、

お念仏もお浄土もわかりません。

で、法然上人は、この本願に、

さらに「選本願（せんじやくほ
んがん）」と

申されまし
た。選本と

いうことは
選びえらぶということばでありま
して、私のために如来さまの方か
ら選びえらんで下さった法なんだ
ということばであります。

お正信偈にもありますよ。

選本願弘誓世―選本願の本願を
悪世にひろめたもつ。さらに聖人
は、選本願の願海とか、しかれば大乘
の聖人、小乗の聖人、善人悪人みな
等しく選本願の大海に帰して念仏
成仏すべしとおっしゃっています。
この選本の選というものは、たく

選本願のお念仏

さんの中から一番すぐれたものを
えらぶという意でして、択という
のは、決択といひまして、これよ
りほかはないというところさす。
阿彌陀如来はわれら一切の生き
とし生けるものを救うという願ひ
を起されましたが、その四十八通
りの願ひの十八番目の願ひ―こ
の私が往生成仏するたねが誓われ
てあるわけですがこれが一番大切
なところでありまして、自力の諸
行を選び捨てて、他力の念仏一つ
をえらびとるという、これが選本
願ということばであります。

自力のあらゆる行というものは、
凡夫の道ではない。凡夫を救うに
は他力の念仏しかないわけであり
ます。

法然上人の時代、世の中は騒然
としておったわけですが、その中

弱い、そういうものこそ先に救わ
ねばならない。仏の慈悲というも
のは、そういうものではないかと、
おっしゃったわけさす。

仏さまのお救いは、お前の助か
る道はこれより他にないんだと
私が求めえないままに、仏さまの
方から先に、私たちの煩悩の底の
底まで見きわめて、南無阿彌陀仏
のお六字を成就して、これより他
に救われる道はない。どうかうけ
とつてくれよと、如来さまの方か
ら手を合わせて願われておるので
あります。

法然上人は、「すみやかに生死の
迷いはなれようとするならば、
聖道門をさしおいて、選んで浄土
門に帰せよ」とおっしゃり、「浄土
門において正雑があるが、雑行を
はなれて、選んで正行に帰せよ」
とおっしゃる。そ
してさらに「正行
の中にも正業と助
業がある。助業を
かたわらにおいて、選んで正業を
おさめよ。正業とは仏名を称する
なり」とおっしゃってあります。

ここに三つの選ぶという言葉が
出ておりますが、正業を選ぶとい
うのは、じつは私が選んだのでは
ない。如来さまの方で選んでおっ
て下さったのだと受けとられたの
が法然上人です。

如来さまは、私どもの業の底の
底まで見抜いておられる。
仏かねてしろしめして、煩惱具

寺
ごよみ

八
月

- 一日 お講 石田・生地・中新
- 二日 雪ん子劇団名古屋公演
- 五日 日校サマースクール
- 六日 一泊開法 恒例の特別法
座。六日は午
後七時半からお初夜。七日は午
前五時から早朝法話。講師は行
信教授 利井明弘師。
- 一二日 日校サマースクール。
- 一五日 こども盆踊り大会



一六日 盆会。盆参りは午前十時
にそろってお越し下さい。
一九日 日校サマースクール
二三日 雪ん子劇団夏の公演
二六日 日校サマースクール
足の凡夫とおおせられたることな
れば、他力の悲願はかくのごとき
われらがためなりとしられていよ
いよたのもしくおほえるなり」と
と親鸞聖人もおっしゃってあり
ますが、まさにすべてを見抜かれ
た大悲の親なればこそ、この私を
救う手だてのすべてを仕上げて、
これより他にないと与えて下さつ
ておられるが、わたしたちの親さま
阿彌陀如来さまなのであります。

祠堂経出講五十年



富山・影現寺住職

里村了学師

善巧寺の祠堂経にご縁をいただいたのは、私が二十八歳のときでした。お寺にはそれまで、我孫子さんと館さんが来ておられまして前十日、後十日の二十日間つとめられていたようでありましたが、異安心問題で二人とも出講されなくなりしました。

そこで、里村に、と法輪寺の先々代にご案内をうけて出させていだいたわけです。それから五十年：よくつづいたものであります。



途中、富山の天空襲の時にどうして

も出られず一度だけ休ませていただいたことがあります。あとはずっと来させていたでいております。

当時、善巧寺は先代住職が京都におられまして一日だけおこしになる。そこであとは私が導師をして、三部経の繰り読みをいたしまして、そのあと、お説教をさせていたというかたちでした。

寺はさび

しかつたが、

お参りはた

ご縁を喜び、思い出を語る

あ、ここまで吟味しておられるのかと、施主のお心がしのばれたものでございます。

あのころは、それこそテレビもラジオも自動車もない。楽しみとってまったくなかつた時代でしたから、お寺が文字通り心のふるさとでありまして、老若男女、とくに男の方のお参りが多かった。お説教が終わると、広間のえんのかをかこんで、お茶を飲み、話に花が咲いていました。本波のじいさん、それに大蔵の宇之助さんあたりが世話役で、新保さん、栃沢さん、岡田さん、野畑さんといったところが中心だったようです。お座敷の方へはそのあと野崎さん、鬼原さんが顔を出しておりました。

で合わせて百円いただいたことがあります。当時の百円は大したものとして、法外なお札におどろきと感謝の気持ちでいっぱいだったことを覚えております。

そういえば、その栃沢さんのばあちゃん、なんともいえないありがたいお念仏をされましてね。いまでも耳に残っていますね。いやあ、みんなおられなくなつて……

戦後はいろんなものがかわりましてね。祠堂経も十日が七日になり、お参りもずいぶん減つてきました。ものの考え方がかわり、楽しみがふえてきたからでしょうがとくに目立つの

は、男の人の参りが少なくなつたことでしょうね。



里村先生は富山市の中心、辰巳町一丁目の影現寺のご住職で、若いころに若院の実家の行信教校に学び、そのあと本山の布教研究所(現在の伝道院・教学本部)を出られ、現在富山の布教界の中でも長老格でご活躍なさっております。

今回の五十年の思い出は、さる六月二十一日に、若院が影現寺さんをお訪ねして聞かせていただいたお話の一部です。ずっとお参りになつていらっしゃる、この話を讀まれて、ご自分の思い出と重ね合わせてみて下さい。そして、それと気付かず、なんとなくお参りになつた方も、じつはこの五十年、そして百年、二百年の長い長い、不思議なご縁につつまれ、育てられていまのあなたが、わたしがここに生かされて生きているのだということを味わっていただきたいと思うことであります。

とができたんだと思います。元氣なうちは、命のあるかぎり、出講させていたでいて、お念仏の讃嘆をいたしたいと思っております。ことしもまた、祠堂経が近づきました。どうかみなさん、おさそいあわせの上、お参り下さいませ。わたしもいまから楽しみにいたしておるところでございます。(談)

小さないのちすこやかに

「初参式についての消息」を發布

6月1日

初参式についての消息

人間として この世に生を受けることは きわめてえがたいことでもあります。今 はかり知れない縁あつていのちを受けさらに 遇いがたい仏法に遇つて 尊い人生を歩み始められましたこと まことおめでたいことでもあります。

阿弥陀如来は 何ものも本当にはあてにならないこの世に生きる私たちに 眼らない智慧と慈悲のおこころで お呼びかけくださっています。そのお呼び声である南無阿弥陀仏をいただくところに 真実の人生が開かれてくるのです。この真実に目覚めてお念仏とともに生き抜かれた 親鸞聖人のみあとを慕う人間となることが 私たちにとって最も大切なことです。

ほとけの子の誕生は 家族の方々の尊い仏縁であります。このうちは 有縁の方々そろつて聞法に心がけられ お念仏にかおる環境の中で 小さないのちがすこやかに育つよう願つてやみません。

昭和六十一年五月二十一日

龍谷門主 釈 即 如



赤光白光

「小さないのちがすこやかに育つよう願つてやみません」という「初参式」についての消息

が發令された。まことに喜ばしいことである。この初参式は生れた赤ちゃんがはじめてお寺にお参りするといふなんともほほえましい儀式だが、同時に付き添つた親や有縁の人たちがいのちの重さと尊さを味わい、仏の子を育てようと決意する日でもある。▼先日安芸のあるお寺の初参式に出させてもらった時のことである。きれいに着飾つたお母さんはいささか緊張気味（どうやら本人も初参らしい）で、赤ちゃんをしっかりと抱いての受式である。おつとめとお念珠の贈呈、短かな法話とつづいて式が終わつた。と、その時、九十三歳になるその寺の老坊主が、大きな声でお念仏なさつて、それから

こうおつしやるのである。「ああ、赤ちゃんは、かわいいですのう」そしてまたお念仏。また「ほんとうに赤ちゃんは、みーんな、かわいいですのう」でまたお念仏。そしてまた「赤ちゃんはかわいい。赤ちゃんはどれもこれも、みーんなかわいいですのう」▼九十歳を越えたこのおばあちゃんの述懐に本堂に参つた者すべてが胸をあつくし、涙をこぼした。そうだ。本当にそうだ。赤ちゃんは、みんなかわいい。どの子がいふことなく、みんなかわいい。そのかわいいのちをすこやかにと願わない親などいるはずがない。しかし、願ひには行いが伴わねばならない。お念仏にかおる環境は父であり母であり、わたしであり、あなたが日常の生活の中で育（はぐく）んでゆかねばならない。かわいい赤ちゃんを傷つけ汚してはならない。

（本願寺新報より）

慶びの春 花の誕生会

4月
29日



「慶びの春・花の誕生会」——
赤、白、黄色……と今年もざつと十
万個のチューリップが、善巧寺の
境内を飾りました。

おしゃかさまの誕生、
しんらんさまの誕生、そ
れにおじいさん、おばあ
さん、お父さん、お母さ
んそしてぼくたち、わた
したち、もののいのちの
誕生をまとめてよろこび
合いましよう——と、はじ
められたお寺の名物行事も、今年
で迎えて十回目。

二日前に日曜学校の子供たち数

今年も咲いたいのちの花

十人がバスに乗って入善町
へ花つみに。そしてみんな
で花かざり。われらは仏の
子どもなり……というテーマ
で、手をつなぐ子らを十六
枚のパネルに五十一人も。
花の数はこれだけでもなん
と一九二〇〇個。それに境
内のしんらんさま、明教院
さま、大イチョウのまわり
などにきれいに盛り上げて、
境内は花のかおりでいっぱ
い。



舟見の寿楽苑のお
年寄もバスでこられ
て「毎年寄せてもら
いますが、本当にき
れいで、楽しい催し
ですねえ」とよろこ
んで下さいました。

ところで、今回は
十回記念ということで、
風船にお便りと
花のタネをつけて大
空高く飛ばしました。
さて、どこまで飛ん



二十九日はあさからみんなでお
つとめをし、初参式の赤ちゃんに
おじゆずや絵本をプレゼント。住
職のおはなしも聞きました。

そして
そのあと
は境内で
楽しい緑
日。わた
菓子、フ
ーセン、
おだんご、

こんにやく田楽、甘茶など夢を語
る会のおじいさんや婦人会、白鶴会、
日校OBのみなさんが大サーブス。

でいったやらと思っていましたら、
な・なんと！ あの小さな風船が、
わたしたちの夢をのせて、飛んで
飛んで飛んで、遠く遠く、福島県
の西郷村まで届きました。

以下は福島県西白河郡西郷村大
字熊倉字風吹一〇の、はがじゅ
んちゃんからのお便りです。

まつきみさちゃんへ みさちゃん
のとはしたふうせんが、福島
の西白河郡西郷村というところまでと
んできました。いっしょにとんで
きた花の
たねは庭
にまきま



した。き
つときれ
いな花が
さくと思
います。それでは さようなら。
とんだとんだ いのちの花
咲いた咲いた ゆめの花



初夏を彩る「六輔七転八倒野休み落語会」

田植など春の農作業が一段落した農家の人たちの野休み時期の今、宇奈月町浦山、善巧寺（雪山俊之住職）で毎年行われている「六輔七転八倒・野休み落語会」（宇奈月町夢を語る会主催）が、こしも二日夜に行われた。生の落語に接する機会のない富山県では貴重な催し。宇奈月町や黒部、魚津、富山市内など県内各地から約五百人が入場、広い御堂はいっぱいになった。熱のこもった口演と、聞き入る客の呼吸もぴったり合って爆笑の連続。初夏の夜の落語のひとときをたぐり楽しんだ。

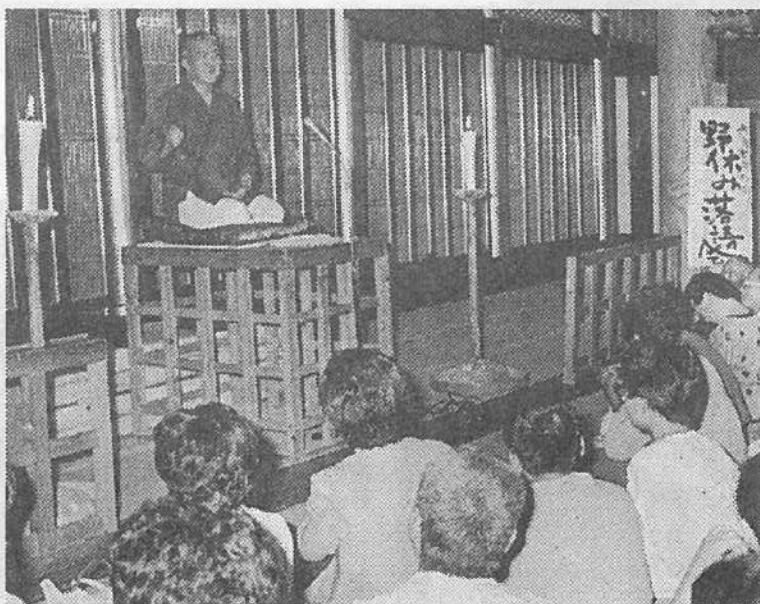
落語会はことしで九回目。善巧寺若院で宇奈月町夢を語る会のメンバーであり、作家永六輔さんの友人の雪山降弘さんの招きで訪れたのをきっかけに、以後

恒例の催しとして定着した。永さんは、息の合った落語家とともに東京で寄席以外の寺院で落語会を開いており、この輪を広げようと地方にも出かけるようになった。

境内にはまん幕や高ちようちんがかかけられ、生の太鼓や囃子（テープ演奏）で寄席ムードが盛り上がる中、出演者が次々に高座に上がった。二つ目の入船亭

真打ちの入船亭扇橋、柳家小三治の皆さん。扇橋と小三治は第一回落語会からの三治は第二回落語会からの

苦笑渦巻く 六輔の「老い」



永六輔も高座で熱演、盛況だった野休み落語会

扇橋、小三治至妙の話芸

扇太、次いで座長の永六輔、色物で紙切りの林家一楽、

顔なしみ。永さんのはなしは、健常

をテーマにした漫談。友人 人を書き出した老いの兆しの野坂昭如、小沢昭二の三を面白おかしく話した。T

Vの出演者の名前を知らない、画面に向かってあいづちを打つ、何のコミンヤルが最後まで見ても分からない一など、日常生活の中から引例。昭和一ケタ生まれの頑固でちょっとこっけいな老いの兆しには、客の中で同感する同年代の人が多く、若い人たちからも笑いが渦巻いた。

一楽の紙切りは華麗、繊細の妙技。囃子に合わせて紙にはさみを入れ、客の注文にに応じて「田植え」や「カッパタヌキ」「十二面観音」などを次々に切り抜いてプレゼントし、興を添えた。

入船亭扇橋の出し物は「茄子娘」。悟りを開いたはずの高僧が栽培しているナスの精の美女の情におぼれ、旅に出て五年後に帰ってみると美女と自分との間にできた子がいて「親はナスとも子は青つ」と落ちる話。老いても色気は絶えぬ生身のおかしさ、かなしさをしぐい語りで聴かせた。

柳家小三治の「景清」は盲人が観音様に願をかけて目が開き、女房に「初にお目にかかります」とあいさつする落ち。抑揚のはっきりした熱演で客をひきつけ、トリらしい座もちで締めくくった。

満員御礼

「評判を聞いて、一度来てみたいと思っていたんですが、今回やっと実現しました。いいですねえお寺の本堂で聞く落語。満足しました」――滋賀県からお越しの美園超性さん。

「いや、ほんと、すごい。本物ですね。よかったわ。おもしろかった。また案内してください」――富山の絵の先生 大谷和子さん。

「ザルをやめて会費制にされたのはちょっとさびしかったけど、そのかわり話はたっぷり。永さんも一時間、トリの小三治さんもたっぷり五十分。こんなせいたくな会は、ちょっとほかにはないですね」――浦山の田中まつえ子さん。

「いきいき富山と聞いたとたん、死んでるなあと思うと永さんおっしゃってたけど、ここのお寺はいつきてもいきいきと生きてますな」――ご常連、大阪の佐々木哲也さん。

◇ 迎えて九回目の野休み落語会もこんなわけで盛況のうちに終わりました。これもとにかく、皆様方のあたたかいお育てのたまものと感謝しております。ありがとうございました。またのお越しを……

宇奈月夢を語る会

さいせん箱

お寺の本堂に、新しい「さいせん箱」がお目見えしました。

ふつうなら「本山へ」「寺へ」と書いておくものでありましようが、ま、うちのご本山は安泰だし、寺の方はまん中の焼香台のところ



にあるし...というわけで、こんな箱にさせていただきました。

「(念仏の心を)子や孫へ」

「(念仏の心を)世界へ」

おそらく、日本中のお寺でたまた一つ、いや二つのさいせん箱だと思います。

子や孫へ——というのは、小さいのちすこやかにと願われるご門主の心と同じです。お念仏の心を子や孫へ伝えるために、善巧寺では、日曜学校、それに、ことばの教室「雪ん子劇団」を開いています。子供たちは大きくはばたきそれこそ、いきいきと育っています。中でも雪ん子劇団の活躍ぶり



はめざましく、ことしも、五箇山や名古屋、はたまた東京まで遠征する勢いです。まあ、そんな子や孫へ、しっかりやれよというお心のある方は向かって左側のさいせん箱へご協力下さい。

つぎに右側の「世界へ」ですがこれは前号あたりから強力に推進しています国連の「緑の木一本

運動」への募金箱です。

うまい肉を食べるために、世界中の穀物の三割を家畜に与え、そのあおりをうけて飢えに苦しむ南の国々の人たち。

そして日本人がバチンと割ってポイと捨てるあの割り箸。年間に五年前のデータでも五億四千万本といわれます。今年の割り箸生産高は十六億本とか。これも南のジャングルの木を、金にまかせて買い占めて、捨てるために根絶やしにしています。乱伐の南は土砂が流れ、畑がサバクとなり、家畜が死に、人が飢えに苦しんでいます。

一きれの肉を割り箸ではさんで食べるだけで、こんなに多くの人

六月十六日

今日は音沢のお講である。地図によって黒部川右岸、海岸から山岳地帯まで善巧寺門徒の住む村邑を試みに列記してみよう。

芦崎(通称新浜)、板屋、浦山新、愛本新、中ノ口、栗虫、音沢。

音沢地域は、一番奥。黒部川が峡谷に入る入口にある。昔は、きこり・かりうど・すみやきによつて生計を立てていたが、現在状況は一変して、先年此処に無人発電所が建設されている。戸数約百二十。凡て善巧寺門徒である。五月一日・十六日、六月十六日、七月一日とお講当番が続く。

八時。台所へ顔を出す。年寄組七人衆は、板の間に坐り込んで、よ

しな」の皮むきを始めている。何れも顔見知りの婆さまたちで、その手つきも年寄が入っている。こちらでは、若手五人娘が山ぶきを茹でている。音沢も段々と世代がかわって、知らぬ顔がまじるようになってくる。

天気予報では今日から雨となっているが、今のところ曇り空から時々日射しがもれている。

此処十日ほど晴天続きで、庭土が乾燥しきっている。此の間、近所の出入りの八人衆が、一日掛りで庭掃除をして下さった



住職日記

お蔭で本堂裏から庭にかけてすっきりと、面目一新の清々しさ。今を盛りに咲いているのは「雪の下」だ。歳時記によると、鴨足草と書いてゆきのしたと読ませている。きじんそうとも言ふ由。

色変りの葉をもつ鴨足草二株、先日知人が持ってきてくれた。山野草ブームで、我が家の庭にも、キエビネ、ジェビネ、クマガイソウ、ヒト

リシズカなどなど、色んな方々の御好意で、あちらこちらに植えられている。

十一時半。お講のおつとめ。今日は、遠く伏木から御同行二十名がお詣りになっている。お説教。

「蓮如上人御一代記開書」ひとつことをきく」を話す。

お昼は音沢の山菜料理。死去案内に接する。舟見、葬祭苑で亡くなった由。お正月には必ず年賀の挨拶に見えた方だった。お葬式の日時を十八日午前十二時と決める。どうやら雨は落ちずに済む様子である。

鴨足草 仄明りして

独居かな

草引くや 垣根に

浴うて 母子草

寺 ぎよみ

九月

茂山忠三郎・狂言の会

◎十八日午後七時半善巧寺本堂



笑いの原点、舞台芸術のルーツとして知られる「狂言」をナマで見る機会は今にありませぬ。このたび、大阪狂言の重鎮である茂山忠三郎師が不思議な縁で善巧寺にお越し下さることになりました。十八日満月の夜。本堂にローソクを灯し、大らかで、軽妙で、はなやかな茂山狂言の舞台を観賞させていただくことになりました。ことは、誠に喜ばしいことであります。二度とないご縁です。是非お越し下さい。会費は千円です。

たちを犠牲にしているわたしたち。もしそれに気付いたなら、やはりごめんなさいと謝まらねばなりません。そして一本でもいい緑の木を世界のサバク化地帯へ植えるための資金カンパに協力しようではありませんか。

そんな思いのさいせん箱です。字はこうした心に賛同して下さい。永六輔さんが書いて下さいました。あなたも息長く、ご協力下さいますように。

彰表会 犯協 雪ん子劇団

夏は五箇山・名古屋で公演

雪ん子劇団が五月二十九日、黒部地区防犯協会から表彰を受けました。「自主防犯活動の重要性をよく認識し、防犯思想



表彰状

この功績を表彰する
貴団は自主防犯活動の重要性をよく認識され防犯思想の普及高揚を推進され多くの功績をあげられました
昭和六十一年五月二十九日
黒部地区防犯協会 荻野幸和 星田孝雄 星田上田敬之
雪ん子劇団は、この夏二つの遠征公演を行います。
一つは七月二十九日、五箇山での公演。これは浄土真宗系の幼稚園や保育所の園長さんが、全国から集まって大会を開かれますが、その折に「小さないのちすこやかに」というテーマの問題提起劇として「うちのとうち

の普及高揚と各種犯罪の予防等に積極的な活動を推進し、多くの業績をあげられたのでその功績を讃えて表彰します」ということでありまして、これはつまり、雪ん子の子供たちがみんなとっても良い子であるということではめて下さったらしく、うれしいことだと喜んでいきます。
ところで、その良い子の雪ん子劇団は、この夏二つの遠征公演を行います。
一つは七月二十九日、五箇山での公演。これは浄土真宗系の幼稚園や保育所の園長さんが、全国から集まって大会を開かれますが、その折に「小さないのちすこやかに」というテーマの問題提起劇として「うちのとうち

日曜学校サマースクール



昨年夏からはじめました日曜学校のサマースクールです。門徒総代の沢田最一先生と、富山高校の中山慶一先生に、スポーツの楽しさ、勉強のおもしろさを教えていただく現代版「寺子屋」です。
開校は八月の毎週火曜日、五日、十二日、十九日、二十六日の午前八時から十時まで。
宿題に悩む人、進路を考える人、教育相談にも応じますので、どこからでも、どなたでもどうぞ――

善巧寺の常例行事

お花の会	お夢の会	雪ん子劇団	日曜学校	お講
毎月第一土曜日	毎月第二土曜日	毎月第三土曜日	毎月第四土曜日	毎月一日・十六日
毎月第一土曜日	毎月第二土曜日	毎月第三土曜日	毎月第四土曜日	毎月一日・十六日

「見るお経」第二巻 八月完成

わかりやすく、たのしく、美しい、見るお経の第二巻「マハーカッパ・お経のはじまり」が、完成、八月中旬に発売されます。
若院が本山の制作スタッフの一員となって進めているビデオアニメーションシリーズで、今回は、おしゃかさまのおしえをお経として後代にのこす大事業をはじめたマハーカッパ（まかかしよう）の物語です。
百べん聞いてもわからないお経

一泊聞法

夏の夜の一泊聞法は八月六日の夜から七日の朝にかけて催されます。今回は若院の兄、利井明弘師の出講です。夏休みのおじいちゃんおばあちゃんの合宿です。おさそい合わせお参り下さいませ。

合 掌

六月二日の落語会での六輔談話。「いやですね。恥かしいですね。いい人、いい味、いきいき富山だ。あれ聞いたとたん、ぼくなにか、ああ、ここは死んでるな。って思います。だっていきいき生きてるところはいきいきっていいもの」

なかなかきびしい。けど、当たってるなあ、という発言でした。いい味だって、新鮮な材料は豊富だけど、京都やフランスに負けないグルメ文化を持っているわけじゃない。それにいい人だってそうですよ。親鸞聖人は罪惡深重の凡夫とおっしゃった。つまりこの世は、罪を罪と知らず罪を重ね、迷いを迷いと知らず迷っている恥かしい人間ばかりだということであります。

もちろん、願いはわかります。いきいきとした富山、いい人ばかりの世界。それに越したことはないけれど、もつと身のほどを知りなさい、とおっしゃっているのが如来さまということも忘れないようにいたしましょう。

